

書評

姫井昭男 著

精神科の薬がわかる本 第3版

宮崎 仁

世の中には、「精神科の薬は、うさんくさい」と思っている人が多い。その中には、患者だけではなく、精神科を専門としない医師や対人援助職もたくさん含まれている。

一方、精神科を専門としない医師や対人援助職が、精神科の薬のことを無視して、自分の仕事を進めることはできない。プライマリケアの外来を受診する患者の3~4割は、何らかの精神疾患や精神的問題を持っている。また、統合失調症のために精神科で薬物治療を受けている患者が、風邪をひいて来ることもあるし、介護を要する状態になることだってある。「精神科の薬は、うさんくさい」と敬遠してはいられないのが、リアルな現場の状況なのである。

そこで、一念発起して、精神科の薬についてまじめに勉強しようと、精神薬理学のテキストと格闘してみても、次々と登場するレセプターやら神経回路やらに翻弄され、頭の中は、ますますモヤモヤして、途方に暮れることになる。

そんなときこそ、本書『精神科の薬がわかる本』の出番だ。

冒頭に置かれた『「抗うつ薬」がわかる』という章のページを開くと、いきなり「原因は未解明。実は対症療法なのです」という見出しの文字が目飛びこんで来る。そうか、うつ病の薬物療法は「対症療法」だったのか。こんなことを、ズバリと教えてくれる精神科医はいなかった。これだけで、ずいぶんとスッキリする。

「ざっと知りたい」という初学者からのわがままな要望に応えるのが、初版以来の本書の優

れたコンセプトであるが、精神科診療に必要な不可欠な薬剤が、新薬も含めて厳選されており、そのエッセンスを過不足なく伝授してくれる。今回の改訂では、「処方薬依存への具体的対応策」といった、いわば「精神科医療の暗闇」の部分に対する果敢なアプローチが加えられているところも見逃せない。

本書の解説は、単なるエビデンスの羅列ではなく、現場での苦労や困り事を熟知していなければ書くことのできない「血の通った」文章である。たとえば、SSRIとSNRIの使い分けを論ずるところで、「取り乱しやすさや余裕のなさがみられるときにはSSRIを、やる気のなさや億劫感が認められるときにはSNRIを、といった具合に選択していきます」と書かれているが、これが臨床家の「実感」というものだ。そして、このような「実感」の中にこそ、私たち初学者が本当に知りたい処方のこつや心得が光り輝いている。

「精神科の薬物療法では、正しい知識と効果のイメージを持つことが治療者・患者ともに重要なのです」という著者からのメッセージを念頭に置きながら本書を通読すれば、「精神科の薬は、うさんくさい」というスティグマ(偏見)から解放され、処方する側と処方される側の双方が幸せになることができる。

(宮崎医院院長)

●A5 236頁 2014 定価：本体2,000円+税
医学書院刊